

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23521003

研究課題名(和文) マヤ遺跡への古代文明イメージの意味づけと文化資源化に関する観光人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological Study on Ancient Civilization Image Production in Maya Archaeological Site as Cultural Resource

研究代表者

杓谷 茂樹 (Shakuya, Shigeki)

中部大学・国際関係学部・教授

研究者番号：90410654

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：メキシコのチチェン・イツァ遺跡公園を中心に、古代から現代に至るまで遺跡を取り巻くさまざまな人間のまなざしを受けながら、その姿を変えてきたさまを「遺跡誌」として整理し、そこで古代文明イメージが次々と創出され、使用され続けている遺跡公園の本質を、1)遺跡の公園化と地元社会の歴史と現状、2)ホストとしての観光圏で行われるマヤイメージの操作、3)ゲスト側が持つマヤイメージのあり方の3点に注目した文献調査およびフィールド調査を通して理解した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I have intended to elaborate the "ruinology" of Chichen Itza Archaeological Park in Mexico, considering its in(/out)side landscape changes caused by many kind of gazes on it for long time from ancient time up to now, and have understood the nature of the archaeological park in which the ancient civilization images continue to be created and consumed constantly, through document and field studies focusing on following three points: 1) the history and present situation of the park and its surrounding societies, 2) the intentional manipulation of Maya Images in the host touristic spots such as Cancun and Riviera Maya, 3) the Maya Images held by guest tourists from all over the world.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：文化人類学

キーワード：文化人類学 観光 遺跡公園 マヤ文明 古代文明イメージ 文化資源

1. 研究開始当初の背景

観光人類学においては、文化というものが常に新たに生成を続けているダイナミックなものであることを前提として、観光という現象の中で、対象となる文化が客体化され、それが操作されてゆくプロセス、あるいは文化の担い手としての地元住民の対応というものに関心が置かれる。本研究が対象とするマヤ遺跡の場合、かつてそこに文化が展開していた時代と現在との間にはっきりとした断絶があるため、現在この遺跡を通して語られ、イメージされる(古代)マヤ文化は、実際に「生きられている文化」としての側面が欠如しているなかで、様々なまなざしによる意味づけが積み重なって、ダイナミックに創出と消費が繰り返されている「創造された文化」としての側面が際立っている。そこに変わらず存在しているのは遺跡という場所ではなく、その意味づけはすべて現代のものなのだ。その意味で遺跡を通して語られるマヤ文化は、遺跡によって与えられたあるテーマのもとに新たに創造された文化であると言い換えることができるだろう。

さて、本研究が対象とするユカタン半島北部では国際的リゾートであるカンクンが建設された1970年代以降急激に開発が進み、現在も北米最大の観光地として世界中から観光客を集めているが、そこには「マヤ文明」の遺跡が点在しており、重要な観光資源として利用されている。

本研究では、この観光資源化されたマヤ遺跡について、人間に関する記述としての「民族誌」に倣い、「遺跡」が意味づけられたことの反応としてその姿を変えてゆくさまを「遺跡誌」という手法で描き出し、そこで古代文明イメージが次々と創出され、使用され続けている様子を遺跡の側に寄り添いながら観察することで、文化資源が創造されるプロセスを考察する際の新たな視

点を得ることを目的とする。

人間の生活の場は、その人間が活動することを放棄した時点で「廃墟」となる。その廃墟のほとんどは土の中に埋もれてしまい、そのまま忘れ去られてしまいが、その中に幸運にも(不幸にも?)何らかの形で後に再発見されるものがある。そういった「廃墟」は、後世に生きるものによって何らかの意味づけがなされることで、はじめて「遺跡」と呼ばれうるものとなるのである。いったんは忘れ去られ、後に再発見されるというプロセスを経る以上、多くの場合、「遺跡」がかつて担った文化と現在遺跡周辺に存する社会が有する文化との間に断絶が生まれることになる。メソアメリカでは16世紀にスペインの征服を受け、植民地化されてゆく過程で、その断絶は極めて大きなものとなった。そして、この断絶は遺跡に対して様々な意味づけが自由に行われ得る要因となり得たのである。

我々現代に生きるものは、しばしば古代というものにロマンを感じ、その舞台となった「遺跡」に様々な思いをはせる。近年、開発の波に押し流され、破壊の危機にさらされている「遺跡」も多々あるが、こうした「遺跡」をしっかり調査し、修復して保存しようとする動きもこうした思いの上に成り立っている。そして、修復、保存された「遺跡」の多くは公園化されて観光客を迎え入れている。そこには「遺跡」とともに長年暮らしてきた地元住民の思い、「遺跡」から古代の様子を科学的に解明しようとする考古学者の思い、観光化によってもたらされる経済的な利益を追求しようとする内外の人々の思い、「遺跡」を地域あるいは国家のアイデンティティの象徴に祭り上げようとする政治的な思いなど様々なまなざしが交錯している。そうした観光の脈絡で意味づけられた「遺跡」を、報告者は「遺跡公園」と呼ぶが、これに向けられた様々

なまなざしは観光客への「遺跡公園」の見せ方に大きな影響を及ぼし、ひいては「遺跡公園」の姿を変貌させていくのである。こうした「遺跡」が「遺跡公園」となり、周囲の状況に応じてその姿を変えてゆくさま、すなわち「遺跡」の生き様は「遺跡誌」として描き得るのではないだろうか。

この地域の「遺跡公園」を巡る研究には、たとえばQ. Castañedaによるチチェン・イツァ遺跡公園の観光化が周辺住民の生活に与える影響についての研究が数少ない中でもよく知られているが、報告者もこの研究のその後を意識して、平成19年度から21年度の「日常実践におけるマヤ言説の再領土化に関する研究」(基盤研究(B)(海外学術調査)、研究代表者:東北大学、吉田栄人)というプロジェクトの中で、こうした周辺住民である先住民を対象にして、彼らが「遺跡公園」を中心とした観光にどのように関わろうとしているのかを考察してきた。またそうした際の「遺跡公園」のあり方に関して、平成14年から16年度の「マヤ・イメージの形成と消費に関する人類学および歴史学的研究」(基盤研究(B)(1)(海外学術調査)、研究代表者:東北大学、吉田栄人)というプロジェクトの中で、主にマヤ系先住民に関する一般のイメージが「遺跡公園」の中でいかに生産・消費されているかを考察している。これらの研究の中で、世界遺産となったチチェン・イツァ遺跡公園や、その他の観光化が進んでいるマヤ「遺跡公園」のいくつかでは、先住民はしばしばそこから排除されてしまう状況が見て取れたのである。それは「遺跡公園」が古代文明イメージで囲い込まれてしまっているからであり、自然の一部のようなイメージで語られる先住民は、栄光の古代文明のイメージにそぐわないということによる。

しかしながら「遺跡公園」を囲い込んでしまう古代文明イメージそのものについて

は、これまで問われることはなかった。そもそも「遺跡公園」というものは先人たちの英知を現代に生きる我々が学ぶ場所であるはずにもかかわらず、観光化された「遺跡公園」の中で提示される古代文明イメージは、必ずしも考古学者がこれまでに説き明かしてきた古代の姿ではなく、観光客があらかじめ期待して持ち込んでくるイメージであることが多い。それは海浜リゾートとして様々な観光メニューが並ぶ中で、「遺跡公園」もそのひとつとしてライバルと観光客を奪い合わねばならない状況があって、「遺跡公園」もそれに対応しなければならないことによる。

本研究が対象とするユカタン半島北部のカンクン・リヴィエラマヤ観光圏には、いわゆるマヤ文明の遺跡が数多く存在しており、これまでそれこそ無数の考古学調査が行われてきた。ただし、そうした考古学による「科学的」な説明も、「遺跡」を巡るその他の自由な意味づけの数々と対等に扱わなければ、現在を生きる「遺跡公園」の姿は正当に理解することはできない。そうした本研究の視点の置き方によって、はじめて「遺跡誌」が可能となり、文化資源としての「遺跡公園」の観察を通して、「遺跡」への意味づけのあり方とその背景を丹念に記述してゆくことで、文化の創造のあり方について考えることができるのである。

2. 研究の目的

本研究はメキシコ、ユカタン半島北部のチチェン・イツァ遺跡公園を中心に、古代から現在にいたるまで遺跡を取り巻く様々な人間のまなざしを受けながらその姿を変えてきたさまを「遺跡誌」という方法を用いて整理し、そこで古代文明イメージが次々と創出され、使用され続けている様子を、遺跡に寄り添った立場から理解しようとするものである。

3. 研究の方法

基本的にメキシコ国および米国でのフィールド調査と帰国後のフォローという形をとった。まずはチチェン・イツァ遺跡公園の「遺跡誌」をまとめるための基礎資料として、文献、パンフレット、新聞記事などの収集をフィールド及び日本で実施した。そして「遺跡公園」に向けられた様々なまなざしと、それへの対応を明らかにするために、同遺跡公園においては観光整備状況のチェック、管理担当者へのインタビュー、遺跡ガイドツアーの追跡調査、遺跡公園内で活動する地元露店店の調査、特別な観光イベントの観察などを行い、カンクンやブラヤ・デル・カルメンなどの観光拠点都市においては建物の装飾や土産物などに見られる古代文明イメージの確認などを実施した。

現地調査は各年度夏季に3週間程度実施したほか、平成24年度には「マヤの予言」で世界が滅びるとされていた12月21日に、遺跡公園内外に集まった人々の様子を観察し、この日の状況をマスコミがどう報じたかを調査した。

さらにマヤ文明に関するゲスト側の関心、認識を理解することを目的として、ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアの博物館におけるマヤ展示（特別展を含む）のあり方を調査した。

4. 研究成果

上記の研究方法により、チチェン・イツァという場所が、再発見された後、さまざまな意味づけをされ、観光化されることで現在の遺跡公園の姿にいたっている過程について、まだまだ不完全ながらも、そのアウトラインを構築することができたと考えている。

チチェン・イツァが遺跡として欧米で広く知られるようになったのは、1843年に米

国人ジョン・ロイド・スティーブンスによって出版された『ユカタンの旅の事物記』によるものといえる。未だ写真が一般的でなかった時代に、この本の正確に描写された銅版画の挿し絵は、欧米の読者にチチェン・イツァ遺跡をはじめとする「マヤ文明」の視覚イメージを強烈に植え付けるのに大いに役立った。この本に触発されて、その後何人もの研究者や探検家がこの地を訪れるが、新大陸の古代文明に関する知識がほとんどないこの時代には、ヨーロッパの伝統的な視点から、この地のイメージが語られることが多かったことは言うまでもない。

新大陸の古代文明としてマヤ文明という認識が定着し、その遺跡としてチチェン・イツァが位置付けられるのは、20世紀初頭から中頃にかけて、考古学調査が実施されて以降であるといっている。とくに1924年から20年近くの間実施された、米国カーネギー研究所のチチェン・プロジェクトは現在の遺跡公園の形を基礎づけたといっている。そしてプロジェクト開始とほぼ同時期に、フェルナンド・バルバチャーノ・ペオンによって、チチェン・イツァを訪れる観光ツアーが開始され、遺跡内に宿泊施設が建設されている（現在のホテルマヤランド）。

メキシコは第2次大戦後、アカプルコの開発を皮切りに観光開発政策を推進してきたが、1970年代初頭にカンクンの開発が始まると、チチェン・イツァ遺跡公園の景観にも影響が出るようになる。とくに第1期カンクン開発が一段落した1980年頃には、それまでカンクンに出稼ぎに行っていた地元住民が大量に戻ってきて、公園内に進入して露店を開くようになったのである。

1988年にチチェン・イツァは世界遺産登録されたが、その際に公園内の露店は全て外部に排除され、遺跡の「囲い込み」が行われた。それは「先スペイン期の都市 チチェ

ン・イツァ」という登録名に対応する形で、公園内のノイズを除去するという行為でもあり、地元住民は遺跡入口に設けられた施設で商売をする事になった。

この間、カンクンはハリケーンなどの災害やチアパス州での先住民反乱などイメージダウンとなり得る数々の事件を乗り越えながら、急激に観光客数をのばしてきた。そして21世紀に入ると、その南に広がる地域がリヴィエラ・マヤ地域として新たに開発されてきた。こうした観光開発の拡大により、カンクンはメキシコ南部5州と中米4ヶ国からなる「ムンド・マヤ」地域の中心地に位置付けられるようになったのである。

こうしてユカタン半島北部の観光の規模が巨大化してゆく中、かつて遺跡公園の「囲い」の外に排除された地元住民が再び不法に遺跡公園内に進入してきて商売をはじめている。これに対しては何ら有効な対策が取られることがなく、現在では1000人規模の露店商が公園内で商売するまでになっているという。

一方、チチェン・イツァ遺跡公園では観光客が事前に学習し、期待して持ち込むマヤ・イメージが提示されている。それは考古学者などが示す「科学的」なものばかりではない。その一例が2012年12月21日の一大イベントである。この日は、マヤ長期歴で13.0.0.0.0という節目にあたり、欧米で「マヤの予言で世界が滅びるとされた日」という言説が流布していた。実際にはそのような「予言」は存在せず、考古学者や人類学者も遺跡公園も「新しい時代の始まり」という表現をしていた。それにもかかわらず、この数日前からチチェン・イツァ遺跡公園は、非マヤ系をふくむ先住民集団や米国のニューエイジのグループなど、そしてこの日を遺跡で迎えようとする観光客で一杯になった。それは遺跡公園という場所で日常的にせめぎ合っている考古学と観光の一定のバランスが

崩れた機会だったといえるだろう。

ここまでの3年間で、チチェン・イツァという遺跡への意味づけのあり方と、それに合った遺跡公園の形の変化を「遺跡誌」という形で整理する努力をしてきた。そこには自然と人類の関係のパラダイムシフトやメキシコの政治状況の変化など、非常に大きな流れも関係していることもわかった。ただ、現状として、当初の予想を大きく超える形で、遺跡公園内の地元露店商と遺跡管理者側としての国家あるいは州政府との軋轢がいままさにピークを迎えようとしており、この点に関しては、引き続きウォッチしていかなければならないと考えている。また、調査者の責任として、特に社会的弱者である地元住民の立場に立ち、この問題の有効な解決に向けての方策を今後提案していく必要性も感じている。その意味では「遺跡誌」としてとりあえずの区切りを打てるのは、少なくともこの問題がいずれかの形で決着したあとになるのではないだろうか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

杓谷茂樹、「マヤ文明とパワースポット」『まほら』80号、pp.14-15、旅の文化研究所、2014年(査読無し)。

〔学会発表〕(計 1件)

杓谷茂樹、「ユカタン半島北部地域におけるマストურიズム状況と先住民」ラテンアメリカ社会文化研究会第15回例会(於：南山大学) 2011年7月2日。

〔図書〕(計 3件)

『メソアメリカを知るための58章』(共著) 井上幸孝 編著。共著者：青山和夫、小原正、嘉幡茂、黒崎充、古手川博一、小林貴徳、杓谷茂樹、禪野美帆、敦賀公子、福原弘織、本谷裕子。全359頁、明石書店、2014年。

「ベリーズ、英語圏のマヤの国」(pp.286-289)、「遺跡利用と観光開発 -チチェン・イツァを中心に-」(pp.324-328)の2章を担当。

『ホンジュラスを知るための60章』(共

著) 桜井三枝子、中原篤史 編著。共著者：大越翼、金澤直也、木下雅夫、杓谷茂樹、新地浩一、關谷武司、高野剛、滝(寺田)奈々子、田中一弘、田中高、富田晃、仲佐保、中村誠一、那須隆一、西方グロリア、西方憲広、長谷川来夢、望月博文、吉田和隆。全 331 頁、明石書店、2014 年。

「ホンジュラスの国土と自然環境 国のあり方を特徴づけるもの」(pp.14-17)、「国際的リゾート地カリブ海 バイヤー諸島の過去と現在」(pp.44-47)、「コパンの「再発見」 ジョン・ロイド・ステーブンスとその時代」(pp.62-65)、「征服者たちの足跡 強者どもが夢のあと」(pp.78-81)の 4 章を担当。

杓谷茂樹「カンクン、リヴィエラ・マヤ観光圏のマヤ系先住民 - マスツーリズム状況下での自律性をめぐって」『メキシコ その現在と未来』安原毅、牛田千鶴、加藤隆浩編、pp.147-169 (全 217 頁) 行路社、2011 年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杓谷 茂樹 (SHAKUYA Shigeki)

中部大学・国際関係学部・教授

研究者番号：90410654

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし